

郷土室だより

第122号

平成17年6月15日

編集・発行

中央区立 京橋図書館

東京都中央区築地1-1-1

電話 3543-9025

刊行物登録番号 17-036

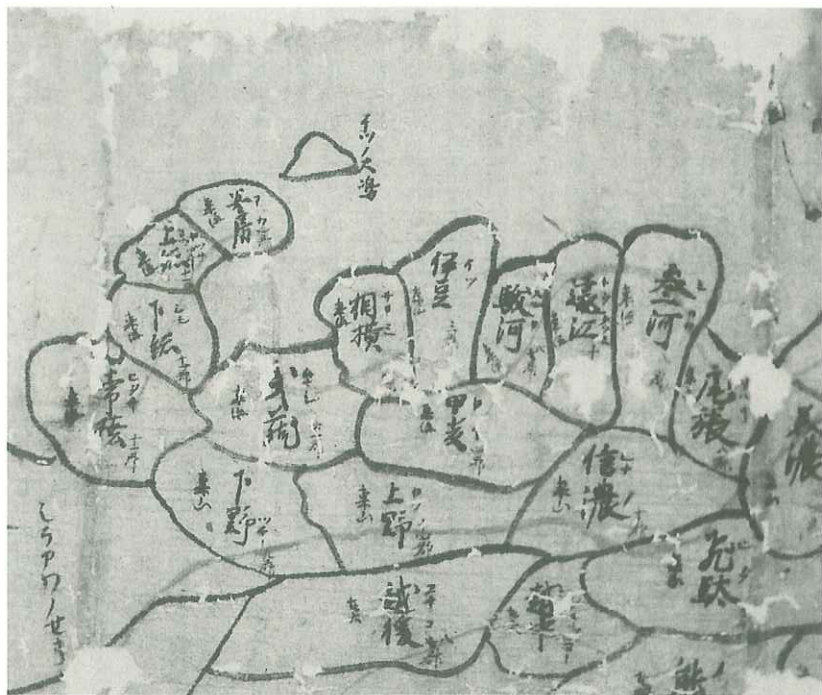
「変りゆく都市像」(1)

◇はじめに

長く続いた「橋」の話しを一応打ちきって、この号から「江戸の中の江戸」であった中央区を中心に、都市の変遷のあり方をたどって見ることにします。改めていうまでもなく都市は《いきもの》ですから、絶えず新陳代謝を繰り返しながら変化を続けています。

わたしが先号まで、この「郷土室だより」に書きつづけた内容は、近世最大の都市になった江戸の生成から、その地理的な拡大を終えるまでのプロセスに重点を置いてきました。都市という概念は「ある場所の経済活動の状況」のことですから、これまで書いてきたことはいわばハードな《都市の条件》に重点を置いてきたわけです。

今号からは構想を改めて、都市としての江戸のソフト面を中心に描いて見ようという試みです。繰り返すようですが「江戸の中の江戸」だった中央区の範囲で、どれほどの新しい《都市》が見つけれられるかは、心もとない気がしますが、なにはともあれ、そのような方向で「われらの郷土」を見つけていきたいと思っています。



南が上に描かれた日本列島＝現存する最古の日本図
(嘉元日本図＝1305年、京都仁和寺蔵より)

◇「オランダ西鶴」

わたしは最近の学校教育での国語・国文学の教育現場の具体的な様子はほとんど不案内ですが、さして昔ではなかった時代には井原西鶴という名前は、少なくとも高校生にとっては、知っていなくてはならない人物の一人でありました。

改めて、その井原西鶴（一六四二～一六九三）寛永十九年（元禄六年）の国文学的な観点からの全体像を見ると、「大坂人・江戸前期の浮世草

子の作者・俳人」だとされていま

す。彼が俳人の西山宗因にしやまそうゐんの弟子だった時期に、一晚に俳句数千句をよむという興行を行ない、「オランダ西鶴」という異名を取ったことが知られています。彼の著作分野別の「俳諧」の中に『大句数』・『大句数』（独吟「二万三千五百句」などという作品がありますが、これは現在でも良く知られている京都の十三間堂で行なわれる「通し矢」の別名である「大矢数」をそのまま俳句集の題名にしたものでした。

西鶴の豊富な発想とボキャブラリーは同時代の人々を圧倒するものがあつて、「オランダ西鶴」というカタカナ混じりのアダ名は、恐らく日本人では最初の名だったことでしょう。

◇短編小説の名手

西鶴は師匠の宗因の没後、俳句と平行して仮名草子かなぎょうしとも浮世草子うきよざうしとも呼ばれる作品（現在の概念での短編小説ともいえる）を書き始めました。ふたたび国文学的表現を使えば「雅俗語を折衷し、物語

の伝統を破って性欲・物欲に支配されて行く人間性を生き生きと描いた」作品を書きつづけたということになります（仮名草子と浮世草子うきよざうしを区別する考え方もある）。それらは人間の享楽世界を描いた好色物、滅び行く武士の世の美をその気質に見出した武家物、町人の経済生活を描いた町人物などに分類されています。

さらに付け加えると彼はその生涯の後始末役に北条団水ほくじょうだんすいという人物に恵まれ、没後に団水によって『西鶴置土産にしやまおきみやげ』（浮世草子五巻・元禄六年刊）・『西鶴織留にしやまおりどめ』（浮世草子六巻・元禄七年刊）などが編集・刊行されています。これは西鶴とその作品の支持者がその死後でも変らなかつたことを物語っているものでしょう。

本号での西鶴の見方は「好色一代男こうしよくいちだいなん」（貞享三年「一六八六年刊」）で始まる好色物という分野が開拓される前年に、次に紹介する『西鶴諸国にしやましよこくばなし』（貞享二年正月・大坂伏見呉服町真斎橋筋角・池田屋三郎右衛門開板）という本が出されていることに注目しました。この本が出版された翌年には

『好色一代男』の主人公世之介よしのすけをトッパバッターに、『諸艶大鑑』が刊行され、その翌々年には『好色五人女』・『好色一代女』が刊行されています。つまり一連の好色物の前触れ的にこの『西鶴諸国にしやましよこくばなし』と『懐硯なつかのすずり』（貞享四年「一六八七年刊」）の二冊の「地理書」が書かれています。

◇諸国と海外

この場合の「地理書」とは、諸国の怪異談・珍談異聞、要するに珍しい話を収集したもので、「世間の広き事、国々を見めぐりて、はなしの種をもとめぬ」とあります。徳川家康が江戸に来てから四十八年目に生れた彼が、成人して俳諧師・作家になつて自由に「はなしの種を取材するため」に、諸国に旅行が出来る様になつていたのである。

しかし、当時の「諸国」といえば現在の日本人が海外旅行する外国に相当するでしょう。太平洋戦争が終わり、昭和二十七年に講和条約が締結された年の七月に羽田に東京国際空港が開港しています。が、一般人が現在のように盛んに

海外旅行に出かけられるようになったのは、その約三〇年後のことでしたから、戦国時代の尾を引いた江戸時代初期の旅行自由化に要した年月と、戦後の日本人海外旅行の普及ぶりに要した年月は、あまり違わなかつたともいえます。それゆえに西鶴時代の日本列島には「広い世間の珍しいこと」が山ほどあつて、この最初の短編小説家の取材と創作意欲をおおいにそそつたのです。その『西鶴諸国にしやましよこくばなし』巻五の七に次のような江戸の話があります。

◇銀かねが落おちてある

「物毎ものごと正直なる人は、天も見捨たまはず。難波人なにわのひとひさしく、江戸に棚たな出して、一代世をわたる程もふけて、二たび大坂にかへり、楽々と暮らされける。」

これは原作のはじめの部分ですが、意味としては「大坂の人が久しく江戸に店を出して、一生暮らしてゆけるほど儲けて、再び大坂に帰って楽々と世を送っていた。」で始まります。以下適当に現代文に直して紹介すると、

その江戸で成功した人の所に律儀だけ取り柄で、その人柄ゆえに暮らし向きの思わしくない男が尋ねてきて、「貴方のように江戸にいつて稼いで見ようと思えますが、今はどのような商売をしたら良いでしょうか」と聞いたので、「今は銀を拾って歩くことが、まだしも良い」と答えた。(この「まだしも良い」といういい方には泣かされます。引用者)

律儀な男は真に受けて、「なるほどこれは人の気がつかないことだ。私も江戸にいつて銀を拾ってきましよう」といったので、少しばかり哀れにもなり、また滑稽にも感じたので道中の小遣い銭やら、江戸の懇意な人宛の紹介状(原文では「其元へ、かせぎにくだる者也。万事頼。」)などを書いてやった。

やがて律儀な男は紹介された「人宿」の出居衆(主に日雇いの武家奉公人などの斡旋業)「人置き場」(の従業員)になったのだが、律儀な男はその翌日から股引・脚絆をつけて出かけ、日暮れ過ぎて帰るということが十日はかり続いた。

「人宿」の亭主が心配して、「商売の相談もしないで、毎日どこへ

出かけるのか」と尋ねると、律儀な男は小声になって「主人様には隠しますまい。私はこの江戸へ銀を拾いに参りました」といった。それを聞いた亭主は腹を抱えて笑い、大坂からこの男をなぶり者にして寄越したのだと思い、「さて、毎日そうして出られて、銀を拾われたか」と聞くと、「こちらへ来てから、昨日だけは不具合でした。他の日は拾いました。あるいは銀七匁、先の折れた小刀、または秤の重り、かたし目貫、何やかや取り混ぜて四百種ほど拾いました」といった。

亭主は肝を潰して「これは珍しいお客様だ」と近所にも触れまわると、近所の人々も「これは今まで聞いた例もない。はるばる大坂から、人の言った事を真に受けて、正直に下つてきた心掛けは感心だ。話しの種にもなる事だ。わざと落として拾わせてやれ」と小判五両出し合つてその男に拾わせられた。それから律儀男は次第に富貴になって、通り町(現在の中央通り)に屋敷を買い求め、棟にむね門松を立てて、広いお江戸で正月を重ねていった。

という話である。いいかえる一人の実直というより愚直な男の成功物語ですが、実はこのはなしの根っこは、かなり深いものが有ったのです。

◇江戸だな

江戸時代の特にその中期までは、日本中の商人の経営上のあこがれの的は江戸だな(江戸棚)とも江戸店とも書かれました)を持つことにありました。とくに中世から日本中の富と文化を集積させていた京の商人が、江戸時代になると一様に希望し目的にした事は「江戸店持ち京商人」になることでした。それは同じ先進産業地帯である伊勢の商人にも近江の商人にとつても共通な願いでした。もちろん大坂商人も同じで、大坂で活躍した西鶴の場合は前項で紹介したように大坂商人が江戸で大儲けして一生安楽に暮らせる身代を作った人のことを書いています。

戸開府を機会に商人の憧れの的になったのかという理由を考えてみると、なんといつても関東の江戸に幕府を開いた事と、豊臣家を滅ぼした結果として元和偃武という平和主義を掲げて、江戸に永住することを明らかにしたことになりました。

天正十八(一五九〇)年に徳川家康が赴任するまでの江戸は、小田原を本拠とした北条氏の一支城の城下町でした。この支城が約一五〇年前に太田道灌が築いた江戸城の事です。その城下には確かに道灌以来の町や寺院がありましたが大規模な銃砲戦を想定してない時代のままの城を平気で使っていた北条氏の後進性そのままに、産業としての商工業も姿を消してしまいました。当時の先進商工業地帯だった上方の都市を見た目には、三河出身の徳川の家来たちにも江戸は草深い田舎に見えました。しかし、上方の商人たちは「草深い田舎」と傍観者または旅行者の感覚で見過ぎさずに、初期の江戸に「未来への発展」を期待して、京商人は江戸に支店を出して呉服・木綿・生糸・繰り綿・真綿・小間物・蠟燭・雛人形などを扱う

支店を江戸に出したのです。

実際にはその時には多くは幕府御用達商人といった役割で、特定の町屋敷を拝領する形のもが主力を占めたようです。一例を挙げれば呉服町(現在の八重洲一丁目)・本両替町・金吹町・本銀町(何れも現在の日本橋本石町・同室町辺)などに京商人は集中しました。伊勢商人の場合は木綿・紙・荒物・水油・茶などを売る支店を江戸の日本橋に面した、その名も伊勢町はじめ大伝馬町一〜三丁目に軒を並べました。近江商人の場合は主に通り町筋(今の中央通り)に沿って日本橋の南から京橋に至る町筋に畳表・青筵・蚊帳・呉服・木綿・生糸などの商店街を形成させています。

これらの商店の集中は、徳川幕府の開府(慶長八年Ⅱ一六〇三)が決定され、それに伴って徳川家の収入も約二四〇万石から八百万石にふくれ上がったのをはじめ、政治の中心地になったために全国の大名が江戸に集中し始めたことによる邸宅造り。その集中を受け入れる施設としての江戸城の大建設が同時に必要になった事に応え

ることでした。

◇近世都市のスタート

それは日本列島全体が交通の難易こそあっても、徳川幕府という単一政権が支配するようになったために、原則的には誰でもが日本人としてこの列島のどこへでも行けるようになったことと、江戸城建設がきっかけとなって人よりも物資を運ぶ船が、それまでは日本海を中心に航海していた状態から太平洋沿岸に航路を拡張するようになったのです。

これは『日本書紀』の限りでは日本海航路に関する最古の記録は斉明天皇七(六六二)年のことですが、その時点ではすでに日本海沿岸航路は北は樺太・蝦夷、そして沿海州・朝鮮半島・東シナ海の範囲に、ほぼ環状に沿岸航路が形成されてきた事が推定されています。つまり、日本海沿岸は長い間、日本列島における大陸からの「表日本」だったのです。

斉明天皇以降、約九百五十年後に、その安定した海域から、台風の通路であり、黒潮のうねる太平

洋に、幾つかの航路を定め定期的に大型帆船を運用する人々が進出し始めた時から、この国の近世という時代が到来しました。

この新しい幾つかの廻船航路は後に「東回り廻船」・「菱垣廻船」・「樽廻船」という様に整理して呼ばれた商業用の定期航路であったことはいうまでもありません。繰り返しになりますが、日本の歴史で近世と区分される時代は、徳川幕府が江戸に成立した事、それに伴って日本列島を船で一周出来る様になったことを意味するものだったのです。

◇新興都市では

さきの西鶴の『諸国ばなし』の「銀」を拾った男のはなしに似た作品はかなりあって「木片」を拾い集めて長者になった話などもあります。江戸城建設のための天下普

請で全国から多数の武家や労務者が何十万という単位で、江戸で働いていたのですから、「銀拾いの男」の「十日で四百種類ほど拾った」というのは、あながち誇張ではなかったと考えられます。

一挙に現代に飛びますが高度成長期になる前の事ですが、まだ都心に戦災の跡が残っていた時期の公共事業(道路清掃・簡易な道普請など)の日当は二百四〇円、略して

「ニコヨン」と呼ばれた時期がありました。そのニコヨンの友達から聞いた事に「銀座や日本橋の盛り場」を早朝に歩いてみると、意外に沢山の拾い物が出来るという事で朝の十五分くらいでニコヨンの収入くらいは軽く拾えたと聞いた事がありました。まさに四百年前の新興都市江戸の風景に重なる話だったことを思い出しました。

早朝の盛り場といえはカラスが我が物顔にポリバケツをひっくり返している時間のように戻ってしまいました。ゴミ出しも進歩してそうそうカラスの勝手にはならなくなつたのと同時に、治安が悪くなつて夜道を歩く人が少なくなつた事にもなります。

《歴史》はこのように足元の変化を鋭く反映させながら、積み重ねられていくようでもあります。今はニコヨンくらいは拾えるのでしょうか。

(鈴木理生)